

## 京セラ株式会社

### 2014年3月期第1四半期決算カンファレンスコールでの主な質疑応答内容

(2013年8月1日実施)

#### 【第1四半期実績】

Q：第1四半期の利益について、ファインセラミック応用品関連事業は、前期第4四半期に比べ減収にも関わらず、利益は横ばいとなっている。また、通信機器関連事業とその他の事業の利益が悪化している理由と今後の見通しについて教えてほしい。

A：ファインセラミック応用品関連事業の減収要因は、前期第4四半期はメガソーラー向けの売上がかなり多かったため。利益が落ちなかった理由は、売上構成の違いによるもの。第1四半期は前期第4四半期ほどのメガソーラーの売上はなく、住宅用とメガソーラー用のウェイトは、ほぼ半々となった。通信機器関連事業は、一部の部材調達が計画よりも遅れたため、第1四半期に予定していた売上が、第2四半期にずれこんだものがある。第2四半期にこの期ずれ分の出荷を予定しているため、第2四半期は第1四半期の落ち込みをカバーし、改善を見込んでいる。

その他の事業は、基礎研究開発費の増加により減益となった。

Q：その他の事業の売上減少理由。

A：その他の事業に含まれる、子会社の京セラコミュニケーションシステムは前期第4四半期に基地局やソーラーの設置関連の売上が大きく伸びたが、第1四半期は少し落ちている。

Q：その他の事業は、第2四半期以降は正常化していくのか。

A：第2四半期以降は上がってくる。

Q：第1四半期は、為替の影響を除くと実質減収減益と見えるが、どのような評価をされているか。

A：価格プレッシャーもあるので、為替のメリットがなければ売上は減少したということではない。利益は、為替の影響を除いても前年同期比で増加している。ソーラーエネルギー事業は、前年同期比で為替を除いても上がってきている。部品需要は前年同期並の水準。

#### 【第2四半期以降の見通し】

- Q：第2四半期以降の利益動向をセグメント別に教えて欲しい。公表予想を達成するには、第2四半期以降、各四半期350～400億円程度の利益水準が必要になり、第1四半期の250億円からは各四半期100億円程度の積み上げが必要となるが、どのセグメントが貢献するのか。
- A：第2四半期の利益は、第1四半期よりも増加する見通し。まず、第1四半期に赤字であった通信機器関連事業の改善を見込んでいる。第1四半期から期ずれした分を第2四半期で取り戻す。通信機器関連事業が一番貢献すると見ている。電子デバイス関連事業や半導体部品関連事業については、デジタルコンシューマ機器関連向けの増加が第2四半期から貢献する。ファインセラミック部品関連事業についても環境は良くなってきている。半導体製造装置用部品や設備投資関連についても増加を見込んでおり、収益貢献を期待している。

#### 【ファインセラミック応用品関連事業】

- Q：ファインセラミック応用品関連事業のうちソーラーエネルギー事業は、前期第4四半期と比べ、出荷量、売上、収益性はどのように推移したか。また、第2四半期以降の見方について教えてほしい。
- A：ソーラーエネルギー事業の出荷量は、前期第4四半期に比べ減少した。前期第4四半期の出荷は高水準だった。第2四半期以降は、メガソーラー、住宅向けともに堅調に推移すると見ており、第1四半期を上回る計画。
- Q：今期の出荷量は前期比20%強の増加という見方でよいか。
- A：前期は800MWの実績、今期は1GW以上を目指しているが、計画に変更はない。出荷量は第1四半期よりも今後上がっていく。

Q：価格状況について。

A：最も活況な市場は日本だが、年間10～15%程度の下落率を見込んでいる。

Q：ソーラーエネルギー事業の収益性は、前期第4四半期から第1四半期にかけて改善していると思うが、機械工具事業も改善しているのか。

A：ソーラーエネルギー事業の改善は大きいですが、機械工具事業も前期第4四半期に比べ、利益率、利益額ともに伸びており、高い収益率を確保している。ただし、ソーラーエネルギー事業の改善の方が大きい。

Q：ソーラーエネルギー事業については、第2四半期以降はメガソーラー向けの売上が増加するので、第1四半期の利益率が一時的に良かったということか。

A：第2四半期以降、住宅向けは堅調に上がってくる。前期の第3四半期、第4四半期はメガソーラーのウェイトが高かった。今期は住宅用とメガソーラーのバランスが良くなる。収益性は維持していく。

#### 【部品受注の動向】

Q：8月受注をどう考えているか。セラミックパッケージはスマートフォン関連向けの動きが鈍いように見える。

A：現在、各事業部門から聞いている限りでは、増加してくると認識している。ただし、どの程度の増加になるのかが、まだ見通せていない。

Q：第2四半期以降、スマートフォン向け部品の売上が増えるということだが、アプリケーション別にみると、月次受注はどのように変化してきているか。7月の実績、8月以降の見通しについて教えてほしい。

A：2月を底に回復しているが、一部顧客の在庫調整があり、横ばいという状況が続いている。顧客の新製品投入を考慮すると、部品受注が上がってくることは間違いない。例年、第2四半期が最も受注が強く、第3四半期にその売上が寄与することを考えると、今月から増加することを期待。

Q：6月から7月にかけての部品の受注動向を教えて欲しい。第2四半期の受注が見通せないとのコメントがあったので、特に半導体部品関連事業は想定していたよりも増えていないとの印象を持っている。

A：7月は予定の数値だが、6月から7月にかけては、ほぼ横ばいの状況。

Q：6月から7月にかけての受注動向に、セグメント別の格差は見られるか。

A：ソーラーエネルギー事業を含むファインセラミック応用品関連事業を除くベースで、ほぼ横ばい。

#### 【通信機器関連事業】

Q：海外の新キャリア向けのモデルの数量や投入タイミングは、計画よりあまり変わらないと考えてよいか。

A：少しずれており投入は第2四半期以降。海外の既存客先向けは予定通り。

Q：国内外に分けて第1四半期の実績と第2四半期の見通しを教えてください。

A：第1四半期の実績は、前年同期比では国内が減少し、海外が増加した。採算面では、国内はコンスタントに利益を計上しているが、海外は厳しい状況。この結果、通信機器関連事業全体で赤字となった。海外事業については、受注状況は悪くはなく、コンスタントに生産、出荷をすれば低い水準でも利益を計上できるが、第1四半期は部材調達の影響があった。部材調達問題については、7月にキャッチアップできたところもある。また、8月、9月で新客先向けについても出荷できるように準備を進めている。第2四半期については心配していない。

Q：国内については、売上は減少しても利益はある程度出せていると受け取った。数量が下がっても、利益は出せる体制になっているということか。

A：環境は厳しいが、何とか利益は確保している。

Q：第2四半期の通信機器関連事業の利益の改善の規模感について、30～40億円程度の改善を期待しているのか。

A：数値は申し上げられないが、その程度の改善は目指したい。

#### 【情報機器関連事業】

Q：情報機器関連事業の利益は低下傾向にあると考えられる。第2四半期、第3四半期と利益は下がっていつてしまうのか。今後の見方は。

A：欧州市場は厳しい。価格を下げないと伸ばすことが難しい状況。しかし、今後については、現状からさらに悪化するとは考えていない。事業環境を考慮し、4月から価格の設定も含めて、対策を打っている。第2四半期以降は、ユーロの水準が想定通りであれば第1四半期と同等以上の利益水準は維持できると考えている。

#### 【その他】

Q：営業利益と事業利益の差が大きい理由と第2四半期以降の見方について。

A：社内取引の基準値の見直しにより、本社部門が受け取る収入が減少したため。第2四半期以降は、第1四半期と同じ水準が続くと思う。

以上